

蓮華王院長寛造像の研究(二) — 様式的考察とその後の蓮華王院造像 —

武笠 朗

本稿(一)が刊行されたのは平成十九年(二〇〇七)三月のことであつた¹。それから十年も経ってしまったのは、偏に本稿執筆者の怠慢によるもので、本群像の院政期彫刻史における位置を明らかにすることの重要性は変わるところはない。本稿(二)では、(一)で予告していた通り、長寛造像の様式的考察、蓮華王院の院内堂塔の検討(慶派の場としての蓮華王院)などを行なう。なお、(一)と同様、長寛二年(一一六四)蓮華王院創建時の造像を長寛造像、建長元年(一二四九)焼失後の再興造像を建長再興造像と称する。

本稿(一)刊行後、蓮華王院造像に関するいくつかの重要な成果が発表された²。まず、平成二十二年(二〇一〇)に『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代造像銘記篇』第八卷(以下『鎌倉時代造像銘記篇』と略す)が刊行された。一卷すべてが建長再興造像の巻で、蓮華王院造像全体の記述も含んで重要である。また、平成二十八年(二〇一六)には、佐々木守俊氏による、千体造像の意味や後白河上皇の千手信仰の始まりについての論考が出た。千体造像などの平安後期の大量造像の契機として、奮然がもたらした五台山の一万文珠信仰があつたとし、また後白河の千手信仰を、久安元年(一一四五)の母待賢門院崩御の際に園城寺隆明所持の千手二十八部衆の画像を道覚から譲られて以来の若年からのも

のとした。本稿(一)では明らかにし得なかつた問題に、新たな史料をもつて明快な答えをもたらしており、従うべきものと思われる³。

第一章 長寛造像の様式的検討

一 長寛造像の抽出と像の概要

現在の蓮華王院本堂(三十三間堂)は、建長元年(一二四九)火災後の建長年間(一二五六)にはほぼ完成し、文永三年(一二六六)に像も整つて供養が行なわれている。桁行三十五間、梁間五間、入母屋造、本瓦葺で東面する。三十三間四面の平面プランで、桁行二〇mに及ぶ長大な堂宇である。正面に取り付く向拝の現状は江戸期の修理にかかるが、基本的に建長再興時の状態で今に至っているという⁴。この堂内の中央に中尊丈六千手観音菩薩坐像、その左右、すなわち南北に脇壇を設け、そこに各五〇〇軀の等身千手を立てならべ、さらに中尊の裏に西向きで等身像一軀を置き、等身立像計一〇〇一軀、中尊を合わせて一〇〇二軀を安置するという現状である。南北両脇壇は、いずれも階段状に十段を設け、各段五十軀ずつ計五〇〇軀をならべる。等身像は一号から一〇〇一号まで番号付けされており、南壇上段の一番南の像を一号とし、

以下下方に進み、さらに上段にもどって、順次北側へ進むというルールで北方壇最も北側の最前列の像が一〇〇〇号、中尊後ろの西向きの一軀が一〇〇一号である。現在の雛壇状の安置状況は建長再興時のままで、長寛創建時と同様であったと考えてよいだろう。ならば方は、縦列各十軀で南北壇各五十列となっているが、縦列十軀のならびの現状は、交互に少し左右にずれており、像の重なりを少なくする工夫がなされている。これが当初からのやり方は不明だが、前列二体の間に後ろの一体があらわれ、あたかも像が揺れ動くかのような錯視を覚えさせる配置である。

等身千手観音菩薩立像一〇〇一軀は、いずれも四十二臂型で、像高でおよそ一八〇cmほどを測る。その内一軀（三二二号像）が室町時代の作、八七六軀が建長再興像、一二四軀が長寛造像とされている。いずれもほとんど同形同大で区別がむずかしいが、丸尾彰三郎氏により、建長再興像と長寛造像の選出とその根拠が示されており、その案が現在も認められている。それによると、両者を分ける第一の根拠は、建長再興像の足柄墨書銘に出る作者名で、およそ二六〇軀知られるそれを再興像と確定して、それと似たものを無銘の像から抽出して再興像八七六軀を確定し、残りの一二四軀を長寛造像に比定しそれを様式的に確認するという方法であった。再興像は、長寛像に調子を合わせるべくそれに倣った相近い形状作風のものが多く、丸尾氏の一二四軀も「確保数」でこれより多いこともあり得るとする。建長火災時の状況を伝える『一代要記』には一五六軀を取出したとあり、再興像とした中に長寛像が含まれる可能性は高く、今より多い可能性は十分に考えてよい。また、一二四軀の中に再興像が含まれる可能性もないではなく、いずれにせよその数に若干の増減があるかとみられるが、現在の安置状況でそれを確認するのは困

難であり、丸尾氏の確定数と像の選択に従って本稿では検討を行ないたい。

なお、兵庫・朝光寺千手観音立像が、蓮華王院の建長再興像であったことが確認されている。これを含めると、等身像が都合一〇〇二軀となる。先蹤となった得長寿院の場合は中尊丈六像一軀に脇侍等身像一〇〇〇軀であったので、それと異なる数の意味が注意される。建長再興像は、救出された長寛像の被災状況を勘案して、若干多めに見積もられて造像されたと想像できる。こうした事情の反映が現在の数値とみるのが穏当であろう。

長寛像の概要を一六〇号像（図1・6）を例にみる。髻頂からの像高一六四・六cm、髪際高一五四・一cmを測る。髪際高が五尺九分となるので、ほぼ等身の立像とみなされる。垂髻の頂に仏面、髻の周りに五面、地髪部に五面の十一面を戴き、化仏立像をあらわす。合掌手、宝鉢手と左右各十九臂をあらわす四十二臂型である。条帛、裙、腰布を着け、天衣を掛ける。頭光（放射光）を負い、四重蓮華座上に直立する。像本体の形状は、長寛三年（一一六五）銘福井・羽賀寺像（図13）や嘉応二年（一一七〇）銘滋賀・福寿寺像、治承三年（一一七九）銘長野・覚音寺像（図14）などと変わるところはない。この期通有の千手立像である。檜、漆箔。頭体幹部を四材製（一部前後二材製）とし、内刳りの上割首とする。長寛像・再興像ともにその現状は、昭和十二年から三十一年までの修理の際に整えられたもので、それ以前は、頭上面や腕が分離して別置されるなど、かなりひどい状態であったという。その姿は修理時の復元になるもので、頭上面や腕はその像本来のものとは限らず、さらに後補・新補も含まれている。従って、基本的にその頭体幹部のみが一応当初の状態を伝えるものとみられ、検討の対象となし得る。

二 形式的特質

すでに述べたように長寛像の現状は、昭和修理の際に四十二臂の一般型に整えられたもので、画像の検討は不可能であり、また、各像の写真資料不足や現在の安置状況による各像の実査の困難さなどから、像の作風の検討もなかなかむずかしい状況にある。従ってここでは、おおむね当初の状態を伝えるとみられる像の頭体幹部から、像の形式的特質を検討してみたい。¹⁰

天冠台

まず天冠台の意匠形式について。これについては、かつて、定朝以後鎌倉期までのその形式的変遷を跡付けたことがあった。¹¹それに照らして考えてみたい。長寛像の天冠台は、いずれも本体材から彫出であらわしており、別材製が多くなる鎌倉期と異なっているこの期の傾向に符合する。その意匠形式は、かつて行なった分類では次の通りであった。¹²図版入手が困難で一二四軀すべての確認ができず、確認ができた計六十一軀分の内訳を示したが、今も状況は変わっていない。一六〇号(図6)、九九九号(図9)などのA形式(紐二条・列弁・花形)が六十一軀中五十七軀、九一九号(図7)などのB形式(紐・連珠・紐・列弁・花形)が四軀で、ほとんどがA形式であった。半分弱の数値だが、現存長寛像、ひいては当初像一〇〇〇軀についても、ほぼ同様であったと考えてよいのではなからうか。

天冠台の意匠形式は、定朝以後から十二世紀半ば頃まではB形式が主流で、長勢の代に完成したこの形式が正系仏師に受け継がれていく。それに対してA形式は、十二世紀前半に始まり、この長寛造像以後十二世紀後半に広く流布したかにみられる。B形式よりA形式が連珠を刻まない分簡略型だということができ、千体という大量造像に合わせたの技法

的選択という可能性もあり得るわけだが、十二世紀後半期にA形式の作例が増えることは在銘作例からも明らかであり、長寛造像が十二世紀後半期の奈良仏師から慶派系の作例であったとみなしうる。また、平安末から鎌倉期の奈良仏師から慶派系の作例にみられる無文帯のような新しい構成要素は認められず、定朝様形式に従う守旧性が天冠台に読み取れよう。近時佐々木あすか氏が平安末から鎌倉期の天冠台形式を分析し、奈良仏師・慶派作例の特徴を抽出されている。¹³無文帯も含め、そうしたいわば新様形式は長寛造像には認められない。

腰布のあらわし方

次に腰布のあらわし方をみてみよう。それは体部前面腰部の衣縁の形としてあらわれる。これについては丸尾彰三郎氏が、建長再興像と長寛像を区別する際の形式的様式的指標として取り上げられた。¹⁴丸尾氏は腰布ではなく「裳」の扱いとし、腰部中央の逆三角形折返しを左右から挟んだ折返しによってそこに「折返し三枚立て」形式(例一六〇号像、図1)があらわされ、この形が蓮華王院造像全体で多いが、長寛造像の場合、「その三枚立ての行儀もよく、落ち付いて、ぴったりと、裳が腰辺を蔽う辺り、安静である」とされた。また、そのアレンジで建長再興の慶派の作例に多くみられる、中央逆三角形状部左右の折返しを「立てずに、段を下して、下縁が膝辺りで横に画する大きな折り返し」にした「段下し」形式(湛慶作四〇号像、図10)があり、写実性をねらったのそれに近い形は長寛造像(例九一九号像、図2)にもみられるが、襷が薄く柔らかでまだ写実的ではないとする。

現在この腰部正面の部分については、中央の逆三角形状の部分(裾(裳)の折返し)で、その左右の部分は裾の折返しではなく、別な衣の腰布であると見做すのが大方の共通理解となっている。すなわち腹前辺り

で衣縁を合わせる（あるいは打合せ）腰布を巻き、裾の逆三角形状の折返しがある上に被さる、という着衣の理論上の解釈となる。この左右の部分に腰布とするか裾とみるか、またそれが具体的にどうなっている状態をあらわしたものとするかは、突き詰めると、平安後期におけるいわゆる腰布の成立といった問題に及んでいくことになるが、さしあたりここでは腰布の呼称で、かつあらわされた形だけの問題として議論を進める。

丸尾氏の提示された二つの形式を踏まえて、山本勉氏は建長再興像の腰布の処理を次のように分類している。¹⁶（一）腰布の下縁がほぼ水平線をなす形、（二）左右の腰布の縁を中央に向って上昇する対称曲線であらわす形。さらに（二）については、腰布の縁が作る対称曲線の交差点が裾折返し部の先端よりかなり下方のもの、裾折返し部先端のすぐ下のもの、裾折返し部の下に隠れるもの、の三種があることを指摘する。

（一）が丸尾氏のいう「段下し」形式で、（二）が「折返し三枚立て」形式である。長寛像一二四軀には（一）形式はない。すべてが（二）形式で、その中にさらにいくつかのパターンがある。

長寛造像の腰布の処理の分類を試みる。ここでは大きく二つに分けてみたい。まず、一六〇号像（図1）のように、腰布が、裾折返しの逆三角形の頂点辺りから左右に、その下縁が「八」の字状（あるいは「入」の字状）に振り分けるようにあらわされているものをA型とする。そして、九一九号像（図2）のような形をB型とする。B型は一律ではないが、九一九号像の場合は、腰布を正中線よりやや右寄り打合せ、縦の衣縁と衣の角が折畳みとともにあらわされ、その下縁は「八」の字ではなく、横直線に近くなっている。¹⁷またB型はいずれも、裾折返しの頂点より下方に腰布があらわされており、A型に比べて腰布が長い印象があ

る。一二四軀をこの二形式で分類してみると、A型が八十一軀、B型が四十三軀を数える。

A・B両タイプの先例をたどってみよう。結論的にいって両者は、十二世紀前半期には菩薩形立像の腰布形式として流布しており、十二世紀を通じてA型がきわめて多く、B型は少ないということが指摘できる。

まずA型について。その年紀の明らかな初例が広隆寺日光月光菩薩立像（図17）である。康平七年（一一六四）長勢作とみられるこの像は、日光月光共に腰布を正中やや右寄りで右前に打合せ、その下縁がゆるい「八」の字状を呈し、その上に逆三角形状の裾折返しが被さる。A型である。ただ、裾折返しの頂点よりかなり下方まで腰布があり、腰布が長めである。

一方B型の先例としては、中尊寺金色堂中央壇阿弥陀三尊像の勢至菩薩立像（図18）があげられる。中央壇の阿弥陀三尊は天治元年（一一二四）金色堂創建時の像とみられ、小像ながらできばえの優れた像で、中央での造像を想定すべきと思われる。勢至像は右寄り打合せで、中央に衣角と衣端の折り畳みがあらわされる。この形は長寛九一九号像に近い。一方の観音像は広隆寺像と同じで、「八」の字型に腰布が立ち上がるA型である。一对の脇侍にAとBを併用していることが興味深い。B型は中尊寺勢至像より前に求めることはできず、十二世紀を通じて事例は少ないが、この中央壇像のように阿弥陀や薬師の三尊の脇侍像の一方にこの形が用いられることがある。天承元年（一一三一）銘鳥取・大山寺阿弥陀三尊像（図19）、安元二年（一一七六）銘埼玉・西光院阿弥陀三尊像などがそうである。

A型は広隆寺像以後、延久元年（一一六九）銘観世音寺十一面観音立像、応徳元年（一一八四）福井・意足寺千手観音立像などが知られ、以

後十二世紀を通じてきわめて多くの作例を見出すことができる。久安元年（一一四五）円信作の西大寺四王堂十一面観音立像（図15）、延暦寺横川中堂聖観音立像（図16）などを主要造像としてあげることができ、十二世紀に一般化した形とみてよいのであろう。A型の先例の広隆寺像は、裾折返し頂点よりも下に腰布があつて腰布が長い印象があつたが、それ以後長寛造像に至る作例では、裾折返し頂点の辺りに腰布下縁の「八」の字が収斂しており、少なくとも正面観では腰布の長さを感じさせない形となつてゐる。こちらの方がA型の典型といえる。おそらく広隆寺像の形がまず成立し、その後、正面観の軽快さを求めての造形的選択で、意足寺像を別途とする十一世紀末頃にA型の典型が成立し、以後正系仏師の手によつて定型化していった。そうした成立と展開の流れが想像されてくる。結局A型は十二世紀に広く流布し、B型はいわばサブ形式でそれほど普及はしなかつたが、三尊の脇侍などに用いられることがあつたということなのであろう。

長寛造像では、A型が全体の七割ほどを占め、B型は三割強であつた。この比率は、長寛造像が、少なくとも腰布を巡る形式では、旧来のそれを踏襲しその範囲を超えるものではなかつたことを示しているだろう。九一九号像にしても、A型に比べればかなり写實的な衣の畳みを見せるものの、丸尾氏がいわれるような、湛慶のそれに通じていくものと積極的にみるのは困難で、像の守旧的性格を示しているものと考えたい。

丸尾氏のいう「段下し」型、山本氏の（一）型は、建長再興の湛慶の一〇号像、四〇号像（図10）などのそれで、中央裾折返し頂点のはるか下方に腰布の下縁が来る。つまり腰布が長いのである。腰布が巻きスカートのように腰を蔽うイメージである。この腰布が長いというのが鎌

倉期的といえるところで、湛慶作例ではおおむね膝辺りまで腰布がかかり、腰布の下縁が水平線になる。康円、隆円、昌円、栄円などの作例もかなり長い。こうした事例は、文治五年（一一八九）運慶作の浄楽寺阿弥陀三尊両脇侍像（図20）あたりが初例とみられ、慶派の優作清水寺観音勢至菩薩立像、肥後定慶の大報恩寺六観音立像（図21）、湛慶作の可能性もある高知・雪蹊寺薬師三尊両脇侍像など、腰布の長くかつその下縁が「八」の字状とならず水平になる作例が鎌倉前中期に出る。これらは、おそらくいわゆる宋風受容の特徴として把握しようと思われるが、再興湛慶造像のそれもそうした流れに位置付けられよう。長寛像のB型にはそこまで長いものはなく、長いものでせいぜい膝上までという印象である。長寛像のB型に、宋風受容のそれを思わせるものは見当たらない。

裾裾の扱い

守旧性をさらに補強するのが、長寛像の裾裾の扱いである。蓮華王院造像全体では、長寛像の大方がそうである裾裾が短い形（一六〇号、図1）と、再興像に多い裾が足の甲にしっかりと懸かる形（栄円作四七二号、図12）の二タイプある。前者はいわば平安後期型で、裾が短く、裾が高い位置にあり、足がほぼ全部出る形である。それに対し後者は裾が長く、足の甲半ばまでを裾がおおい、場合によっては裾裾左右端が地付きにまで及ぶ形となる。長寛像ではほとんどが短いタイプで、長いタイプはわずかに二例のみである。

短いタイプは平安後期の仏菩薩像にきわめて一般的である。広隆寺日光月光像（図17）、大蓮寺薬師如来立像（図22）、六波羅蜜寺地藏菩薩立像などをはじめとして、以後十二世紀を通じて大方がこの形である。裾が短く足下がすっきりしており、軽快感、浮遊感をもたらすが、できれば

えが劣ると立ち姿の不安定感を際立たせることになる。平等院雲中供養菩薩像の立像も短めで、定朝起源の形式かとひとまず想像される。先例を訪ねると、飛鳥後期の作例や奈良時代後期の木彫像、奈良・平安前期の檀像に行き着くが、平安前期から十世紀、康尚時代の作例は大方が裾裾の長い形である。定朝の頃の作例では永承六年（一〇五一）頃の法界寺薬師如来立像は短いタイプである。これは檀像系の像で、その文脈で気になるのが寛和三年（九八七）に京都にもたらされた清涼寺釈迦如来立像（図23）である。和様ないしは定朝様への清涼寺釈迦の影響が昨今取り沙汰されるが、何らかの影響関係を想定すべきなのだろうか。

それに対し長い方は、平安前期、鎌倉期に多い。再興像の内、湛慶、康円、院承、勢円などの作例に裾長が多くみられる。この形は、腰布の場合と同じで、要するに裾が長いことである。丈の長い裾をゆったりと着るといった印象をもたらす。鎌倉期において、運慶の菩薩像（図20）、大報恩寺六観音像（図21）など枚挙に暇ない。十二世紀の作例でも、大治年間（一一二六―三一）の造像とみられる観世音寺馬頭観音立像、西大寺四王堂十一面観音像（図15）、承安二年（一一七二）銘の仏土寺阿弥陀三尊両脇侍像、覚音寺千手観音立像（図14）などは長く、足の甲の形に沿うように裾裾があらわされる。裾の長さは造形的に大きな違いをもたらす。先の腰布の例と同様に、これも宋風受容の一例とみることが可能であろう。十二世紀第二四半期に始まり、仏土寺像、覚音寺像など一一七〇年代頃から普及し、貞応元年（一一二二）経円作銘の滋賀・仏心寺聖観音立像あたりに至るといった流れであろうか。

長寛造像の場合、そのほとんどが短いタイプである。守旧的性格とみなせよう。一九四号、四三四号が長目だが、鎌倉期的な長さには至らない。長めの裾の普及は未だ認められない¹⁹。

条帛の形

続いて条帛の形をみてみよう。長い帯状の衣である条帛を左肩から右脇腹へと斜め掛けしているわけだが、左胸の位置でその一方の端をどのようにあらわしているのか。長寛造像において分析してみたい²⁰。

基本的に二パターンあり、より一般的なA型は、一六〇号（図1）や九一九号（図2）のような形で、条帛の一方の端が、もう一方の下から上にかかって垂下する形である。比叡山横川中堂の聖観音立像（図24）はその典型である。これが、一二四軀中条帛の形が確認できた一一六軀のうち八十二軀を数える。もう一つのB型は、五六二号（図4）、九九九号（図5）のような形で、即成院二十五菩薩の自在王菩薩像（図25）のように、Aとは逆に、条帛の一方の端を上からも一方の下に潜らせて垂下させる形である。これが三十四軀を数える。A型は平等院雲中供養菩薩像以後定朝様菩薩像にきわめて一般的である。これに対してB型は、同じく雲中供養菩薩像の中に見出すことで、定朝様菩薩像の条帛の一形式と見做せるが、作例は少なく、腰布の場合と同様に、三尊の脇侍像の一方にこの形が用いられる例がみられ、²¹ 独尊像では少ないようである。運慶の円成寺大日如来坐像（図26）など、平安末鎌倉初期の慶派系造像にみられる形はB型に似ているが、左肩のすぐ下で一方の下に入る形で、長寛造像のB型とは異なる。B型は十二世紀後半になると、妙法院普賢菩薩騎象像、大阪・金剛寺金堂大日如来坐像（図28）や岐阜・石徹白大師講虚空蔵菩薩坐像など、事例が増えるようである。十二世紀後半期の保守系造像の一傾向と位置付けることができようか。A型七割、B型三割という比率は、B型が比較的多いという意味で十二世紀後半期のな比率とみられるが、むしろ慶派系の形がみられず、定朝様菩薩像の定型を遵守していることこそ注目されよう。腰布や裾裾のケー

スと同じで、長寛造像の保守性を示す。²²

三 様式的特徴

長寛造像の様式検討の注目点として、長寛造像の惣大仏師とみられる奈良仏師康助の作風をそこに読み取ることができると否かという問題がある。これまでの形式分析によって、長寛造像の守旧性が確認されてきた。それを踏まえて、これまで取り上げられてきた作例を中心に個別の様式検討を試み、その問題に及んでみたい。

九一九号像

長寛造像一二四軀の代表としてよく取り上げられるのが九一九号像と一六〇号像である。まず九一九号像を検討する。丸尾彰三郎氏は、蓮華王院長寛造像の大仏師を康助とした上で、長寛造像の中の「最優のもの」の一つ九一九号像を「大仏師康助の作であると仮定することが出来る」とされた。²³これ以後、毛利久氏や中野玄三氏らが、丸尾氏と同じ文脈、すなわち最優の出来映えの作は大仏師の作であろうとの推定で、康助の作としてこの像をあげている。

九一九号像(図2・7)は髻頂までの像高一六六・七cm。天冠台形式はA形式で、天冠台下の耳より前の地髪を毛筋彫りとし、条帛の形はA型、腰布のあらわし方はB型である。形式的には、腰布のあらわし方以外は至って保守的である。この像は、天冠台がわずかに四軀しか知られない(紐・連珠・紐・列弁・花形)形式で、これが連珠を刻む分技法的に手間のかかる形式であるとするならば、髪に毛筋を入念に刻み、また像背面にもきちんと衣文を彫出することと併せて、像の制作の入念さを示すものとみることができる。その穏やかな面貌、両脚部に柔らかくまとわる裙・腰布の表現、胸腹部や腰のボリューム感、そして奥行き之比

較的深い安定した側面観など、たいへん優れた出来映えを示しており、制作の入念さとも併せて、丸尾氏の指摘通り、最優作の一とみることに異論はない。さらにいくつかの様式的特徴を指摘しよう。まずその面貌である。両こめかみの間の面幅が広く、顔の上下が比較的詰まった幅広の輪郭を呈す。このタイプの顔は、西大寺十一面観音像(図15)や峯定寺千手観音像が近く、定朝様の菩薩像の典型的な面貌といえる。十二世紀前半期の円派的面貌といつてよい。かなり伏目なためか、表情がどちらかというとし重たげな感じだが、その幅広の面貌は、天冠台形式が十二世紀前半の主流形式であったことも併せて、この像の前代的性格を示すものと思われる。一方この像は、その腰布の処理がB型で、パターン化したA型でないことが注目される。この腰布の扱いを写実的にみるかどうかはともかくとして、衣文が脚にまとわる様子が的確に表されている。それと同じような印象がその地髪の髪筋の彫りにも感じられる。本像の地髪の毛筋彫りは、束ね目を明瞭にしないで毛筋のみを彫る形で、円成寺大日如来像のそれを思わせる。

ここでこの九一九号像に対する評価の履歴をみておきたい。その変遷は、長寛造像の様式と大仏師康助の作風認識が絡んでたいへん微妙である。議論の口火を切った丸尾氏は、定朝様を示していると指摘するのみだが、それを承けて毛利久氏がかなり突っ込んだ議論を示した。毛利氏は長寛造像が「藤原期の特色をそなえていることは疑いない」としながら、十二世紀後半期の在銘千手造像と比較して、九一九号像は「藤原的なものよりも、むしろ鎌倉彫刻の作風に近いものを多分に含んでいる」とみるべきだとし、それを「康助・康朝などの奈良仏師の作風をあらわすものとみなければならぬ」とされた。²⁴中野玄三氏も、「体が太く」表情も「重厚で」「自然らしさをあらわそう」としている九一九号像

を、先駆的な奈良仏師康助の作ではないかとされた。²⁵ それに対して水野敬三郎氏は、九一九号像康助作説が可能だとした上で「そこに見られる作風は、極めて温雅な藤原末期のそれを典型的に示している」とされたが、その温雅な藤原風が「彼の作風のすべてであったらうか」とし、史料にうかがえる康助の斬新さとの共存を、康助作風の二面性という形で理解しようとしたのであった。²⁶ 近時は、康助作の可能性が史料上高い北向山不動院不動明王坐像(図27)のきわめて斬新な作風を、ひとまず康助作風のベースとみざるを得ないのだろう。九一九号像は、今までも指摘されてきた通り、そこに若干の鎌倉時代風(下半身の衣文表現など)を忍ばせているのかも知れないが、十二世紀後半期の自律的変貌をみせる定朝様作例とみるのが妥当であろう。それを康助の作として、北向不動院像との著しい乖離を康助作風の二面性と理解するのか、これは康助作ではないと結論するのか、いずれかということになる。

康助が長寛造像に大仏師の一人としてどのような形で関わったのか、ここで改めて考えてみたい。伊東史朗氏は、現存中尊像頭上面中の忿怒面一面に古様をみて、康助あるいは康朝作の可能性をみているが、²⁷ これは康助を中尊丈六像の担当とみていることになる。本稿(一)で述べたように、長寛造像では、先例の得長寿院造像に倣って大仏師が五人程度選ばれて造像が進められたとみられる。康助がその一人であったことはおそらく確かだろう。仮に五人の大仏師として、その仕事分担を考えた場合、おそらく一人が中尊丈六像を担当し他四人が脇仏を四等分したか、あるいは脇仏は中尊担当仏師も含めて五人で分担したか、いずれかが考えられよう。建長再興像の場合、湛慶は康円と康清とともに中尊を担当したが、脇仏は湛慶・康円で十五軀である。湛慶一派は主に中尊像の担当であったというべきであろうか。建長再興時の分担と単純に比較

はできないが、一応それを参考にすると前者ということになる。中尊造像を担当する大仏師がいわば惣大仏師で、それが最も上臈であった康助がなり得た大仏師なのであろうか。建長再興中尊像台座銘で湛慶が主張した「康助四代御寺大仏師」、すなわち蓮華王院大仏師が何を意味するのか。湛慶の権利の主張はまさに中尊造像の獲得にあったのだろうか。とすると、康助は今失われた丈六中尊坐像の担当であったことになる。康助の作風の二面性を考えるのでなければ、中尊担当の康助の作は長寛造像には残り得なかったとの可能性に及ぶことになろう。

この九一九号像と、建長再興の院継作一一三号像(図11)が原模の関係にあるとの丸尾氏の指摘が注目される。²⁸ 確かに裙・腰布の衣文形式など、両者は似ているように思われる。そのことが何を意味するのか。院派の先人の作との認識がありそれを真似た結果とするならば、九一九号像の作者として導かれてくるのは、院派の院朝か院尊となる。²⁹ 院派の作とみるのも一案であろう。

一六〇号像

一六〇号像(図1・6)は、若干細身に衣文の彫りも簡略化しているなど、入念さにやや欠ける嫌いはあるが、その澁刺とした若々しい印象の面貌が心地よい像である。九一九号像と異なって両こめかみ部を引き締めて面幅を抑え、やや面長な感じの輪郭となっているのが特徴的である。こうした、幅広ではない引き締まった感じの面貌は十二世紀後半期的である。京丹後市・本願寺の阿弥陀如来立像(建久三年(一一九二)頃か)や長講堂阿弥陀三尊脇侍像(図29)などを思わせる。専定寺阿弥陀如来坐像や妙法院普賢菩薩騎象像などの後白河上皇・法住寺殿関連の造像と似ていることも興味深い。この一六〇号像あたりは、十二世紀後半期の保守系造像の変容を示しているといえるのではないか。九九九号

像(図5)とは、おっとりした顔付きや全体のの柔らかな彫り口が似通う。同系統の作者を想定できるのではないだろうか。

四四九号像

特別展『妙法院と三十三間堂』に出陳されて以来注目されているのが四四九号像(図3・8)である。浅湫毅氏は、四四九号像の鋭いまなざしや進んだ形式から康助、康朝一門の手になるものかとした³⁰。また別稿では、同像を康助、康朝、康慶のいずれかによる作とし、これと面貌がよく似た山形・本山慈恩寺の釈迦如来坐像(指定名称阿弥陀如来)を奈良仏師の作とみなす³¹。腰布のあらわし方と条帛の形がともにB形式となるのは長寛造像の中で最も少数派だが、少なくとも本稿での検討からは、いずれも十二世紀前半期からあり得た形式であり、それを進んだ形式とみなすのは躊躇される。四四九号像を奈良仏師の作とみなすには、奈良仏師の作風がどうであったかの見通しを示した上で、もう少し詳細な検討が必要であろう。

ここで取り上げたいずれの像も、結局は、十二世紀後半期の典型的な定朝様保守系造像という他はない。長寛造像全体についても同様である。脇仏等身像についての結果だが、中尊丈六像が仮に康助作であったとしても、そこに著しい新様の発現があったと想定するのは、脇仏との統一感からかなり無理があるだろう。少なくとも長寛二年の段階では、顕著な新様は発現されなかったのではないかと想像される。

第二章 創建期の堂塔とその造像

蓮華王院は、後白河上皇崩御の一一九二年頃までを、一応その創建期とすることができる。ここでは、この間に後白河上皇が付設した院内の

主要堂塔の造像について検討し、蓮華王院という場の性格を考えてみたい。その際最も注目したいのは仏師の動向である。奈良仏師・慶派の場としてという視点である。長寛二年の供養後、鐘楼、宝蔵、総社、僧房が付設され寺院としての体裁を整えていくが、規模の大きな堂塔の建立は治承元年(一一七七)の五重塔以後となる。院内堂塔として確実な五重塔、北斗堂、院内小堂を取り上げ、続いて近接堂宇とみられる法華堂についてみていく。

五重塔

院内御塔の建立計画は承安四年(一一七三)二月八日より前に計画されたらしい。おそらく前年であろう。『吉記』同日上によれば、この日の時点ですでに御塔心柱が確保されていたこと、しかしながら種々の事情で二月十六日立柱の延引のことが出ていたことが知られる。結局、立柱上棟は同年七月十八日に延引され(『百鍊抄』)、ようやく着工した。

その後、意外に長い約四年五ヶ月という工期を経て竣工し、治承元年十二月十七日に供養されている(『玉葉』『百鍊抄』)。供養導師は僧正公頭、呪願は覚讚であった。いずれも後白河周辺の三井寺僧である。安置仏については『吉記』承安四年二月十七日条にかなり詳しい記述がある。それによれば、御塔御仏八体がこの時点ですでに造始されていたが、前日十六日に法金剛院より還御された後白河上皇は、法金剛院御塔を見たところ「中尊一体脇侍四体」でとてもよく見えたので、まだ間があるから五体にしたらどうかと公頭に問え、と記主吉田経房に命じている。造始後八体から五体への変更の提案がなされたようである。御仏の員数、尊名については、最近校刊された大正大学蔵「蓮華王院御塔供養記」(以下「供養記」)がはっきりとそれを示す。御仏は、天蓋付きで、等身大日如来が定印二体、智拳印二体の都合四体、三尺の四仏(良の阿

闕、巽の宝生、申の無量寿、乾の不空成就）であった。³³心柱に千仏像、母屋柱四本に胎藏金剛界両部諸尊像、上方に飛天菩薩二十四体が図繪されたという。結局仏は、金胎大日四体と金剛界四仏の計八体となったようである。「供養記」は勸賞として仏師康慶が法橋に叙されたことを記す。

北斗堂

北斗堂は寿永二年（一一八三）十一月十日に供養された（『百鍊抄』『玉葉』）。『玉葉』同年九月五日条には、記主九条兼実が、木曾義仲入京で騒然たる中での後白河の「近日被始大造作」を嘆く記述があるが、この大造作は杉山信三氏の指摘通り、³⁴北斗堂造営を指すとみられる。北斗堂の安置仏を示す史料はないが、この堂以前の先行事例から類推してみたい。保延元年（一一三五）三月二十七日供養の待賢門院御願法金剛院北斗堂には、仏師賢円造進の「北斗木造」が安置された（『長秋記』『中右記』）。顕証本『仁和寺諸院家記』所引の『古徳記』によれば、堂は一間四面堂で、一字金輪一体、北斗七星、九曜、十二宮神、二十八宿等を安置していたという。これに先立つ天仁二年（一一〇九）二月二十七日供養の法勝寺北斗曼荼羅堂も同様の尊像であった（『百鍊抄』『殿曆』『願文』）。³⁵蓮華王院北斗堂もこれら先例と同様の尊像を安置したものと想像される。御塔建立の際に後白河は法金剛院御塔を範としたが、おそらくそれと同様に同院の北斗堂を範としたものと推察される。母待賢門院が建立し姉上西門院統子がいた法金剛院を範としたのは、後白河としては自然な成り行きであったろう。北斗法の本尊としての星曼荼羅（北斗曼荼羅）には、円曼荼羅と方曼荼羅の二系統があり、円曼荼羅は天台座主慶円（一一〇一九没）、方曼荼羅は仁和寺成就院寛助（一一一五没）の図と伝える。範となったと思われる法金剛院北斗堂は、仁和寺内で、

かつ高野御室覚法が供養導師を勤仕した御堂であり、寛助の系統の図像であった可能性が高い。本北斗堂造像も仁和寺寛助系の図像に基づくものであったろう。

この北斗堂の造像を担当した仏師は誰だったのであろうか。まずこの造像の造始はいつなのか。法金剛院北斗堂の場合、供養前年の長承三年（一一三四）十二月十五日で（『長秋記』）、造像期間は約四ヶ月半ほどであった（法勝寺は約八ヶ月）。五十体以上に及ぶ造像にしてはかなり短いので、長めに見積もって約半年間とすると、蓮華王院造像の始まりは寿永二年の五月頃となる。ここで注目されるのは、ちょうどその頃に運慶がこの蓮華王院の近くに居たとみられることである。いわゆる「運慶願経」と称される法華経八卷（陽明文庫、真正極楽寺、上野家分蔵）は、その奥書によれば、寿永二年の五月四日から六月七日までの間に、運慶及び女大施主阿古丸の発願により書写されたもので、詳細を伝える巻第八の奥書によれば、御経書写所は「唐橋末法住寺辺」であった。「唐橋」は通りの名とみられ『太平記』などの諸書では九条坊門小路を指しており、これは今の東寺通り（東寺北側）に当たる。そのおそらく東の末で、「法住寺辺」その位置は、現在の九条通りから東大路に大きく屈曲する辺り、東福寺駅の北東辺りであろうか。³⁶運慶願経書写の間、運慶は蓮華王院のすぐ南に居たとみられるのである。³⁷

ここでこの前後の康慶、運慶の動向をみておこう。先述の通り、承安四年二月から治承元年十二月まで康慶は当院御塔の造像に従事していた。その間の安元二年（一一七六）に運慶は、おそらくは康慶指導のもと円成寺大日如来像を造立した。また康慶は、治承元年に静岡・瑞林寺の地藏菩薩坐像を造立している（銘）。そして治承四年（一一八〇）十二月二十八日にいわゆる治承兵火で東大・興福両寺が焼亡する。その

後、運慶願経を経て、文治四年（一一八八）六月十八日に、康慶は興福寺南円堂造仏を京都の法性寺内最勝金剛院で始めたが、翌五年八月には仏所を興福寺一乗院に移して完成に至った。康慶は承安の御塔造像造始より、治承兵火を挟んで南円堂造始に至るまで、康慶の所在は主に京都に確認できる。奈良に拠点があったらうにせよ、少なくとも治承兵火後しばらくの間までは、京都で主に活動していたとみざるを得ない。こゝろみてくると、寿永二年五月から六月に運慶が蓮華王院近くに居たことの理由は、運慶を含む康慶の工房が、御塔造像以来蓮華王院周辺に工房を持ち、そこに運慶が居たからではないのか、と想像されてくる。もう少しダイレクトに言えば、それは運慶と康慶が北斗堂の造像に当たっていたからではないか。誰も予期しなかった治承兵火以前の康慶工房の動きとして、後白河の法住寺殿の周辺に拠点の一を置いたのは当然の戦略であつたらう。後白河と何らかの形で関係を構築した結果、北斗堂造像をも勝ち得たのではないか。北斗堂造像は康慶と運慶によるものとみるべきではなからうか。

院内御堂

後白河上皇は建久三年（一一九二）三月十三日に六条殿にて崩御した（『百鍊抄』）。翌四年三月九日に、その周闕（一周忌）法事のための御堂として、蓮華王院内（小）御堂が供養された（『心記』『帝王編年記』³⁸）。この御堂は三間四面堂で院内西南にあり（「後白河院御法事并御堂供養雜事」）、『皇代曆』によれば、丈六阿弥陀三尊と丈六不動二童子が安置され、阿弥陀三尊は仏師院尊による新造、不動二童子は上皇在世中に「幸経」が造立したものであつた。この御堂の造営経緯はやや複雑で、それを伝える『心記』建久三年六月十日条と『玉葉』同年十月二日条を総合すると、おおよそ次のようになる。故後白河が生前に鳥羽の地に御

堂を建て、「如法仏丈六二体」（『心記』）を安置する御願を立て、当初は鳥羽勝光明院内に建立が決まつて建久二年には事が始まり、さらに六月十日の段階で、仏の内の不動はすでに作り終わって蓮華王院の後戸に安置され、阿弥陀の御衣木加持も終わり、仏師に禄まで給されていたという（『心記』）。ところが同年九月の洪水で「鳥羽為水底」となつたこと、倭約の中進められた造営が白河鳥羽両上皇の鳥羽御堂に劣つて後白河の叡慮に叶うまいとのことで、「蓮華王院法華堂近辺」に移して建てることになり（『玉葉』）、同年十一月十一日に立柱上棟が行なわれた（『心記』）。かくして建立された御堂の本尊丈六阿弥陀三尊像と丈六不動二童子像についてみよう。

丈六阿弥陀三尊像は、上皇生前の御願として建久二年には発願され、翌三年六月十日以前のある時期に御衣木加持がなされ、仏師に禄物が給されていた（『心記』）。これが翌四年（一一九三）三月九日に供養されている。仏師は法印院尊であつた。後白河の願意は不明だが、没後に転じて後白河追悼の阿弥陀三尊となつたに相違ない。この阿弥陀三尊像を以て、後にこの堂は阿弥陀堂と呼ばれるに至つたらしい（『明月記』嘉祿二年（一一二六）七月三日条）。

丈六不動明王二童子像について『皇代曆』は、「法皇御存日」すなわち後白河在世中に「幸経」が作つたとする。後白河が没したのは建久三年三月十三日。御堂及び御仏の発願が同二年中のこととみられるので、それから後白河没までの間に造立されていたと考えられる。「幸経」は音通で康慶に比定して問題なからう。仏師康慶の作とみられる。時に康慶は何をしていたのか。建久二年九月八日に彼は興福寺南大門二王像の造立を巡つて仏師院実と争っているが（『玉葉』）、この建久二・三年頃に南都でさして大きな造営に携わっていた形跡はない。文治五年（一一

八九)に興福寺南円堂造像を終え、この期にいわば本務ともいべき後白河・蓮華王院造像に当たったとみることができようか。不動造像の願意といえば、藤原道長以来病氣平癒が一般的である。後白河の死に至る病は建久二年の十二月二十日頃から始まったらしい(『玉葉』十二月二十五日条)。後白河による如法仏造立とされるが、直接的にはそれをきっかけとする病氣平癒祈願の造像であったのではないか。いずれにせよ、後白河の重要な造像に携わり得た康慶であった。康慶と後白河の密接な関係を示すものといえよう。

蓮華王院東法華三昧堂

この御堂は院内御堂であるかどうかはつきりしないのだが、蓮華王院すぐ東に位置した近接の御堂であった。安元二年(一一七六)八月二十五日、故建春門院の葬堂、法華堂が供養された。後白河の寵愛を受けた建春門院滋子は同年七月八日に没し、同十日に蓮華王院東法華三昧堂に葬られた。待賢門院の例によったという(以上『百鍊抄』『玉葉』)。「玉葉」によれば、この法華堂は、年来後白河法皇が自らの終焉の地となすべく建立していたものだったが、女院の死により急遽作事を進めて完成させ、女院のための葬堂としたという。堂供養の八月二十五日は女院の正日(四十九日)であった。『百鍊抄』では「前建春門院法華堂」と出る。『吉記』承安四年(一一七四)二月二十九日条から九月十五日条までの間に出る法華堂はこの御堂のこととみられ、この頃に造営のことが行なわれ、御仏造像に仏師院尊が関わっていたことが知られる。院尊は御仏光背等の絵様を記主吉田経房に出し、後白河の叡覧を得ている(九月三日条)。

仏師院尊は、久寿元年(一一五四)に鳥羽金剛心院造像の賞を賢円より譲られて法橋になって以後しばらく事績が知られないが、応保二年

(一一六二)には法眼位にあり(『究竟僧綱補任』)、おそらく長寛造像に従事した。その後治承二年(一一七八)にはすでに法印位にあったことが知られる(『御産部類記』所引『山槐記』)。法印になった時期が不明だが、本事績によって法印になったと考えることもできるだろう。いずれにせよ、後白河との関わりが知られる最初の事績であり、事績の空白期を埋める貴重な造像といえよう。院尊の、おそらくは兄弟子に当たる院朝は、堂上平氏の出で、それによって後白河とのつながりを得たかと推察される。院尊がいかにして後白河とのつながりを得たかは、事績の空白期で明らかにしがたいが、本稿(一)で推定した通り、長寛造像への参画がおそらくそのきっかけとなったのだろう。

この他法住寺殿・御堂には、小千手堂、最勝光院、不動堂、法華堂などがあり、御所内での仏事も含め、多くの造像が行なわれていた。例えば、現存する安元二年明円作の大覚寺五大明王像は、法住寺北殿での何らかの仏事に用いられた像とみられる。前代鳥羽上皇期ほどの規模は最早ないが、それでも後白河期造像の中心的な場であり、そこに正系三派仏師が競合したのは当然の成り行きであった。その中で、院尊はともかく、正系に連ならない康慶がここで多くの造像を得ることができたのはなぜなのか。

奈良仏師・慶派の場としての蓮華王院

先述の通り、院内御塔の御仏八体の造立仏師は康慶であった。『玉葉』供養日条によれば、塔供養にあたり、絵仏師頼源の譲りで頼全が法橋に叙され、仏師康慶が法橋に叙された。康慶の事績を通覧すると、承安四年二月から治承元年十二月までの間、蓮華王院という場で後白河上皇発願の造像を行なっていたという事実に、改めて注目すべきと思われる。

治承四年の平重衡による東大・興福両寺の焼き討ちは、結果としてその復興造像という大規模造像の場をもたらしこととなるが、それが予期し得ぬものであったことはいうまでもない。後白河上皇期になって、造像規模が鳥羽上皇期に比して著しく縮小して行く中で、仏師たちが先を見据えてどのようにその造像の場を確保しようとしていたのか。仏師たちの政治的手腕が試される状況であったに相違ない。蓮華王院を含む法住寺殿及びその御堂は、そこで行なわれる仏事の造像を含めて後白河上皇期最大の造像の場であったことは疑いようがない。法華堂造像に当たった院尊、法住寺殿の仏事での五大尊（現大覚寺像）を造進した明円が、この法住寺殿関連で名が上がるが、康慶の蓮華王院造像への関与は際立っている。康慶は、長寛造像におそらく康朝のもとで従事し、御塔造像を得、後白河没時の造像に当たり、北斗堂造像にも当たった可能性がある。後白河上皇と密な関係を作り、蓮華王院近くに工房を構え、蓮華王院関係の造像をほぼ独占した。後白河に接近し、蓮華王院造像に活路を見出した康慶の姿を思い描くことができる。⁴³造像事績以外に後白河との関係を示す具体的事実は認められないが、院・円派は平氏や摂関家などの事績が知られるのに対し、康慶は他に知られない。後白河との関係を積極的に考えるべきと思われる。⁴⁴

康慶が蓮華王院造像に携わり得たのは、すでに本稿（一）で述べたように、長寛造像における康助、康朝の関与に端を発するものであろう。長寛造像に、仏師界の最上臆として関与したとみられる康助は、その弟子康朝におそらくは賞を譲って法眼となし、蓮華王院造像における優位性を確保したのであろう。蓮華王院大仏師というものが存在したのならば、そのもとを開いたのは彼らであった。その路線に乗って康慶は五重塔造像に当たったとひとまずは考えられるだろう。

興福寺僧尋範と奈良仏師

本稿（一）で指摘したが、『究竟僧綱補任』による応保二年（一一六二）時点での仏師の僧綱から判断するに、法眼康助は席次の筆頭とはいえ、僧綱の員数は円・院派と差はなく、康助が惣大仏師を勝ち得たとすれば、それなりの理由があったらうと思われる。そこで注目してみたいのが、蓮華王院供養の導師を勤仕した興福寺僧尋範である。⁴⁵

尋範（一一〇一〜七四、弘寛保延七年改名）は、大殿藤原師実息で藤原頼長や忠実と関係が深かった。また興福寺大衆の支持も得ていた。⁴⁶保元の乱で頼長に連座して籠居を余儀なくされたが、応保元年に復帰し、長寛二年五月には興福寺別当に補され、九月二十二日には、興福寺僧が東大寺にて公家（二条帝）の奉為に修した万僧御説経（寿命経）の導師を勤め（『百鍊抄』『醍醐雜事記』）、そして蓮華王院供養に至っている。

長寛二年における著しい復活の理由は不明だが、⁴⁷応保から長寛年間における二条帝親政のもとで復権を遂げたようである。一般的に供養導師が造像に影響を及ぼすことはそれほどないと思われるが、尋範と奈良仏師の関係が気にかかる。

尋範が藤原摂関家の系譜に連なることは、藤原氏の氏寺興福寺に拠っていた奈良仏師との関係が導かれる。康助と藤原忠実の関係は深かった。康助が忠実・頼長親子を通じて尋範に繋がっていく。また尋範は、師頼実の開いた内山永久寺に保延年間（一一三五〜四一）頃入寺し、頼実没後（一一四二）永久寺を伝領した。永久寺は康慶以後の奈良仏師・慶派の活動の場であった。内山永久寺は頼実により永久二年（一一一四）の創建とされ、保延年間頃には諸堂整備されたらしい（菅家本『諸寺縁起集』『内山永久寺置文』『内山之記』）。康慶の最初の事績である仁平二年（一一五二）の五尺吉祥天像造立は永久寺吉祥堂のそれである可

能性が高い。やはり頼実が開き尋範に継承された興福寺禪定院の丈六阿弥陀と四天王が頼実の作であったとされており（『維摩会并東寺灌頂記』）、永久寺も頼実の代からすでに奈良仏師が関わった可能性はあるが、尋範の入寺以後、奈良仏師の造像の場となったかと想像される。こう考えてくると、長寛造像における奈良仏師の優位性は、尋範の長寛二年における顕著な復活と何らかの関係があったのではないかと想像されてくる。特に気にかかるのは、尋範がこの年五月に興福寺別当となったことである。尋範の推挙もあつて康助が筆頭大仏師となり得たとも想像できる。本稿（一）で長寛造像への康慶の従事を推定したが、長寛造像への尋範の関与があつたとすればその可能性は高まるだろう。

最後に、康慶の法橋叙任について触れておく。承安四年からの御塔造像の功によって康慶は法橋に叙された。ここで彼が「讓」によらず、自力で法橋位を獲得したとみられることに注目してみたい。この期の仏師の最初の僧綱叙任は師匠仏師の譲りによるのが一般的である。康慶は「康朝小仏師」（『養和元年記』）とされるが、この時康朝の譲りでなかったことにはどんな意味があるのだろうか。康朝は長寛造像で法眼になったことを最後に、以後事績が知られない。それから十年後に始まった御塔造像は、康朝存命であれば、長寛造像における奈良仏師優位の流れから推して康朝が担当したはずである。それが康慶の担当となったのは、この時点での康朝の不在を意味しているとみるのが妥当であろう。康朝が、造始の承安四年までに没し、後継の成朝が若年であつたとすれば、康慶がこの造像を勝ち得た筋道として理解しやすい。⁴⁹ 奈良仏師の後継を巡る何らかの重要な動きがこの御塔造像においてあつたものと推察される。それが康慶の自立に、また正系に連なるが若い成朝の不遇に及んだとみられれば興味深い。

注

- 1 「蓮華王院長寛造像の研究（一）―創建の経緯と造立仏師の検討―」（『実践女子大学美学美術史学』二一）二〇〇七年三月。
- 2 本稿で取り上げる蓮華王院造像に関する文献は次の通りである。
 - 一、丸尾彰三郎編『蓮華王院本堂千手観音像修理報告書』妙法院、一九五七年三月。以下『修理報告書』と略す。
 - 二、『三十三間堂』三十三間堂奉賛会、一九六一年三月。
 - 三、毛利久「蓮華王院本堂の彫刻」（『日本仏像史研究』所収、法蔵館、一九八〇年三月）、赤松俊秀・上横手雅敬「蓮華王院の歴史」等の論考を収載する。
 - 三、丸尾彰三郎「千手観音菩薩像 妙法院」（『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代造像銘記篇』八所収）中央公論美術出版、一九七一年二月。以下『造像銘記篇』と略す。
 - 四、宇佐見英司・三崎義泉『妙法院・三十三間堂』（『古寺巡礼京都』一四）淡交社、一九七七年六月。中野玄三「千手観音像（長寛仏）」（『作品解説』）を収める。
 - 五、毛利久「三十三間堂の彫刻―草創と再興―」（『三十三間堂と洛中・東山の古寺』（『日本古寺美術全集』二五）所収）集英社、一九八一年三月。
 - 六、杉山信三「法住寺殿とその御堂」（『院家建築の研究』第一編第六章）吉川弘文館、一九八一年九月。
 - 七、麻木脩平「蓮華王院大仏師の系譜」（『仏教芸術』二〇一）一九九二年四月。
 - 八、山本勉「蓮華王院本堂千手観音像にみる三派仏師の作風―四〇・四九三・五〇四号像を中心に―」（『MUSEUM』五四三）一九九六年八月。

九、京都国立博物館編『妙法院と三十三間堂』（特別展図録）日本経済新聞社、一九九九年四月。

一〇、水野敬三郎他執筆「千手観音菩薩像 京都妙法院」（『日本彫刻史基礎資料集成鎌倉時代造像銘記篇』八）中央公論美術出版、二〇一〇年二月。以下『鎌倉時代造像銘記篇』と略す。

一一、佐々木守俊「五台山「一万文珠」像から蓮華王院千体千手観音菩薩像へ」（『岡山大学文学部紀要』六五）二〇一六年七月。

3 ただ、千と万とはやはり数字上大きな隔たりがあるし、さらにいえば百も含めて、これらを大量造像と一括してよいものかには若干の疑問が残る。

4 山岸常人「蓮華王院本堂（三十三間堂）」（『日本建築史基礎資料集成』

五 仏堂Ⅱ』所収）中央公論美術出版、二〇〇六年十一月。

5 前掲丸尾論考（注2の文献一・三）。

6 浅湫毅「朝光寺千手観音菩薩像について」（『鎌倉時代造像銘記篇』八、四備考九）（注2の一〇）。

朝光寺の一軀の移安は室町期応永二十年（一四一三）とのことで、蓮華王院の室町期の一軀は朝光寺像移安の欠を補うものとする。

7 放射光については、当初からか、建長再興後そうだったのか不明である。彫像における放射光の始まりは、久安四年（一一四八）銘の三千院往生極楽院阿弥陀三尊像などがその早い頃の例か。であれば長寛像光背がそうであっても一応不都合はない。

8 この期の等身立像では、前後割矧ぎか前後矧ぎとするのが一般的である。四材製とする像が多いとされるのは注意される。

9 前掲論考（注2の一・三）による。

10 長寛像の写真については、前掲論考（注2の一、三、九）及び『国宝・重要文化財大全』三彫刻上巻（毎日新聞社、一九九八年一月）所載の図版

を参照した。前者に、二十六軀分の比較的大きな図版がある。

11 武笠朗「西大寺四王堂十一面観音像について」（『美術史』一一〇）一九八六年四月。

12 前掲武笠論考（注11）の註48。この時は丸尾彰三郎氏旧蔵資料の写真資料も参照した。

13 佐々木あすか「平安時代末期から鎌倉時代中期の天冠台形式について―奈良仏師・慶派仏師作例を中心に―」（『MUSEUM』六二四）二〇一〇年二月。

14 前掲論考（注2の一）。

15 そもそも腰布とはいったい何なのか、それを取り込んだ本稿で扱っている着衣形式がいつ成立したかは、ここでの検討課題ではないが、おおよその目途を述べてみたい。長勢の広隆寺日光月光菩薩像の存在から推して、やはり定朝によって成立した菩薩形像の着衣形式であったのだろうと推察される。ポイントは腰布を正面で合わせる形と中央の逆三角形の折返しであろう。腰布は奈良時代の作例にはみられないが、平安前期になって東寺講堂五菩薩像などの密教彫像に、坐像なのだが登場してくる。立像の例ははっきりしないが、九世紀の主要彫像にはあまりみられないようである。広隆寺聖観音立像、室生寺十一面観音立像、道成寺日光月光菩薩立像、醍醐寺薬師三尊両脇侍像などにみえるが、羽賀寺十一面観音立像のように裙を一段折返しさらにその上端を折返ししている例が奈良時代後期からみられており、その区別が困難である。あるいはその誤解が腰布という新たな衣の登場を促した可能性が考えられる。檀像の優作海住山寺の十一面観音立像は平安後期型の原型かとも見做しうる。その後十世紀から十一世紀初めに至るまでの作例の多くは、服制の判定が困難な作例が多く、六波羅蜜寺、遍照寺、禅定寺の十一面観音立像はいずれも、中央逆三角形部は腰布とみられ、その上に裙の折返しがかかっているようにみえる。定朝の平等

院雲中供養菩薩像のうちの立像六軀は、いずれもどのように着ているのか判定するのが困難で、平安後期の定型に至る祖型を求めたい。立像で最も優れたできればえを見せる南二〇号のそれは、大きい逆三角形の中央折返しを設けて一見定型を思わせるが、大きいフリルの付いたその衣は、いずれが裾でいずれが腰布か判別しがたい。平等院像では定型は生まれていなかったと言えるのだろうか。となると定朝次世代で定型は生まれたのだろうか。なお腰布については、坐像のそれを主に検討した佐々木あすか氏の論考がある。

佐々木あすか「平安時代末期から鎌倉時代初期奈良仏師の新形式形成とその展開―菩薩形・明王坐像における裾・腰布の着衣形式の検討より」『美術史』一六一二〇〇六年十月。

16 山本勉「形状 本体」〔鎌倉時代造像銘記篇〕所収（前掲注2の一〇）。
17 丸尾氏のいう、長寛造像における「段下し」形式に近い形である（前掲丸尾論考注2の一）。

18 観世音寺像、西大寺像は丈六の立像であり、裾裾左右を地付きに付けることよって巨像を支えるという構造上の工夫である可能性も考えられる。
19 四三四号像は、腰布も長めでその打合わせ部の処理も少し変わっており、新たな時代に向かっているのかも知れない。

20 条帛の末端の処理については、奥健夫氏が定朝以後のそれを分類されている。奥氏は、左肩部における条帛の一重目と二重目の上下の別で大きくA・Bを分け、Aの①②③とBの④パターンに分類されている。本稿では、左肩部の状況を確認するのが困難なため、これには従わなかった。

奥健夫「誓光寺十一面観音像と像内納入品」〔仏教芸術〕二九二二〇〇七年五月。同論考の注3。

21 鳥取・大山寺（図19）や滋賀・金鉢寺の阿弥陀三尊像などにみられる。
22 すでに筆者は、金剛寺金堂大日像を検討した際条帛について触れ、定朝

様の一般形式であるA型と、円成寺大日如来像のような左胸部で下に潜って垂下する慶派系作例のそれがあり、金剛寺像のそれはいずれとも異なり、定朝様形式の一ながら十二世紀後半に作例が増える形であることを指摘した。

武笠朗「大阪・金剛寺金堂大日如来像考」〔実践女子大学美学美術史学〕二〇二〇〇六年一月。

23 前掲丸尾論考（注2の一）。

24 前掲毛利論考（注2の二所収）。

25 前掲中野論考（注2の四所収）。

26 水野敬三郎「仏師康助資料」〔美術研究〕二〇六 一九五九年九月、『日本彫刻史研究』所収、中央公論美術出版、一九九六年一月。

27 伊東史朗「院政期仏像彫刻史序説」〔京都国立博物館編『院政期の仏像』所収〕岩波書店、一九九二年七月。

28 前掲論考（注2の一・三）。丸尾氏は建長院遍作八四号像と長寛一七四号像との間にも同様の関係を指摘している。

29 本稿（一）第二章参照。

30 浅湫毅「妙法院と蓮華王院（三十三間堂）の彫刻」〔妙法院と三十三間堂』所収〕京都国立博物館、一九九九年四月。

31 以下の浅湫毅論考。

「山形・熊野神社の伝十王坐像について」〔日本における木の造形的表現とその文化的背景に関する総合的考察（考察編）〕〔科学研究費補助金「基盤研究（A）」報告書〕所収、京都国立博物館、二〇一一年一月。

「寒河江の仏像の先進性」〔みちのくの仏像』所収〕東京国立博物館、二〇一五年一月。

32 藤原忠親の『山槐記』の別記である。

三浦龍昭「大正大学蔵『山槐記』蓮華王院御塔供養記」について

(一)(二)(三)『大正大学研究紀要』九九・一〇〇(二〇一四年三月・二〇一五年三月)。

「供養記」所載の「詔書」の中で、蓮華王院について次のように記される。「早当鴨水之車偏、或祐蓮宮之申吉、卅三間壯麗之基也、勝概経年、廿八部護極之砌也、靈威被世」。これは、蓮華王院に、二十八部衆像が治承元年時点で安置されていたことを示唆するものとして注目される。

33 『覚禅鈔』両部大日には「又蓮華王院塔、大日四体四方被奉居(金界二体、台界二体也)」「()内割注」とある。大日四体は東西南北の四方に置かれたものであろう。

34 前掲杉山論考(注2の六)。

35 『江都督納言願文集』巻第一所収の願文によれば、一間四面の堂内に木造北斗曼荼羅として、一字金輪仏頂如来一、北斗七星、九執曜天、十二宮神、二十八宿等像五十六体の都合五十七体が安置されていたという。

36 田中嗣人氏は、現在の「東山区池田町付近」とされる。おおむねその辺りとみられる。

田中嗣人「運慶の生涯と東寺大仏師職就任の意義」(『日本古代仏師の研究』所収)吉川弘文館、一九八三年八月。

37 このことについてはすでに根立研介氏が注目し、運慶が京都の工房を持ち、何らかの造像を行っていた可能性を指摘している。

根立研介「大仏師運慶の生涯」(上横手雅敬・松島健・根立研介『運慶の挑戦』文英堂、一九九九年七月)。

同「慶派仏師工房の組織」(『日本中世の仏師と社会』第二部第四章)塙書房、二〇〇六年五月。

38 院内御堂関係の史料は『大日本史料』四一四所収。

39 この造像による勸賞で、康慶は賞を弟子に譲り法橋に叙させた(『皇代曆』)。この弟子が運慶とみられることはすでに指摘されることである。

運慶も康慶とともに後白河・蓮華王院の造像に関与していたことは注目すべきであろう。

40 『吉記』記主吉田経房は、上西門院、建春門院と近く、平氏政権の実務官僚として活躍した。この法華堂の造営行事を勤めていたとみられ、経房が仏師選定に関与した可能性がある。二月二十九日の段階ではまだ仏師が決まっていなかったようだが、九月三日には院尊が絵様を進上した。

41 小千手堂は安元二年(一一七六)四月二日供養で、千手と二十八部衆を安置した堂であった(『吉記』)。「粉河寺縁起」には「千体乃観音」を安置する「小千手堂」という。建春門院の御堂最勝光院は、承安三年(一一七三)十月二十一日に供養された。平等院を範とし、鳥羽御堂の阿弥陀堂を参考にした阿弥陀堂とみられ、「法花曼陀羅」を安置した小御堂を付設した(『玉葉』『吉記』)。たいへん美しい御堂であったとされるが(『明月記』)、その安置仏や仏師について知られるところがない。不動堂は『吉記』承安四年(一一七四)九月十二日条に「蓮華王院不動堂」と出る。蓮華王院とあるが、造営経過や供養日が知られない。仁安二年(一一六七)六月十六日供養の不動二童子を本尊とする法住寺殿不動堂(『兵範記』『玉葉』)に当たる可能性が高い。

42 康慶の造像についての近時のまとまった論考として、奥健夫氏の次の論考がある。

奥健夫「大仏師康慶の造像」(山本勉監修『運慶 時空を超えるかたち』『別冊太陽日本のこころ』一七六)所収)平凡社、二〇一〇年十二月。

43 そうみてくると、運慶の円成寺大日如来像も、礪波恵昭氏の推定のように後白河周辺にその活動が知られる忍辱山流兼豪(一一一九〜八九)がその造像に関与したとするなら、これも後白河絡みの造像ということになり、康慶・運慶の京都での文脈の中に位置付けられてこよう。

礪波恵昭「円成寺大日如来像考」(『研究紀要』一四)京都大学文学部美

学美術史研究室、一九九三年六月。

44 山口隆介氏は、初期の快慶と後白河のつながりに注目し康慶弟子の中でも特殊な立場に快慶はあったとするが、康慶と後白河の関係がすでに密接なものであったとすれば、その関係性が快慶に及んだと考えることも可能であろう。

山口隆介「総論 快慶の生涯と「如法」の仏像」(『特別展 快慶 日本人を魅了した仏のかたち』所収)奈良国立博物館、二〇一七年四月。

45 本稿(一)の第一章四「政治的動機」の項、及び注30において尋範のことに触れている。

46 尋範については次の論考に詳しい。

鴉田泉「保元の乱と南都―頼長・尋範・恵信を中心に―」(『日本歴史』四九二)一九八九年五月。

この論考で鴉田氏は、保元の乱の南都・興福寺における背景として、藤原頼長・忠実・尋範と藤原忠通・恵信の対立構図があったことを論じている。さらに前者と、寺主信実を中心とする興福寺大衆との間に密接な結び付きがあったことも指摘している。奈良仏師と興福寺大衆との関係の解明は、今後の検討課題となろう。

47 尋範と対立関係にあった藤原忠通がこの年の二月十九日に没している。そのことが関係するのかも知れない。

48 元暦元年(一一八四)六月から建久二年(一一九一)二月の間、興福寺僧の範玄(?)(一一七〇―一一九九)が「蓮華王院修理別当」を勤めたことが知られるが(『興福寺別当次第』)、範玄は文治五年(一一八九)から興福寺権別当として興福寺復興造営に活躍し、建久六年(一一九五)から別当となっている。尋範と範玄という二人の興福寺僧が蓮華王院草創期に関与していることをどのように理解すべきか。蓮華王院と興福寺の関係が気にかかる。

49 康朝と康慶が担当し、造像途中で康朝が没したという可能性も考えられる。ただ、いずれにせよ成朝が奈良仏師の正系であったならば、この造像に携わり得なかった理由が不明である。

本稿の図はすべて複写図版である。出典は次の通り。

図1・2・4・5・6・7・9 注2の文献四

図3・8 注2の文献九

図10・12 注2の文献一〇

図13・14 『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代造像銘記篇』四

図15・17・22・25 『平等院と定朝』(『日本美術全集』六)講談社、一九九四年

一九九四年

図16・24・29 京都国立博物館編『院政期の仏像』岩波書店、一九九二年

図18 『国宝中尊寺展』佐川美術館、二〇〇四年

図19 『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代造像銘記篇』三

図20 『運慶と快慶』(『日本美術全集』一〇)講談社、一九九一年

図21 『日本彫刻史基礎資料集成 鎌倉時代造像銘記篇』三

図23 『世界美術大全集 東洋編五 五代・北宋・遼・西夏』小学館、一九九八年

一九九八年

図26 『運慶 中世密教と鎌倉幕府』神奈川県立金沢文庫、二〇一一年

図27 奥健夫・飯田雅彦「北山不動院不動明王坐像の修理について」

(『仏教芸術』二八〇)二〇〇五年

図28 注22の武笠論考

